“繋ぐ”技術でスマート社会に貢献を

恩地 和明・当社取締役社長に聞く

クラウド・コンピューティングやスマート・デバイスなど、大きなパラダイムシフトが起きていますが、これまで培ってきた技術やノウハウを世の中の急速な変化に活かせるよう、事業のパラダイムシフトも推進していかねばなりません。まもなく就任1年を迎える恩地和明社長に、当社の持ち味を活かしたこれからの取り組みなどについて聞きました(聞き手：本誌事務局)。

「あるべき姿、目標、自分がどうありたいか」を常に描いてほしい

―社長に就任してからまもなく1年を迎えますが、率直な印象は。

恩地　50年前、コンピュータ分野の雄になることを目指して設立された当社ですが、これまで決して順風満帆というわけではなく、先人の方々が事業の集中と選択やイノベーションを繰り返して現在があります。また、その間数多くのお客様にご支援いただいたお陰でもあります。昨今では、そうした当社ならではのスピリットが薄くなってきているのではないかという懸念もあります。経済状況の悪化などもあって、最近では思い切って夢を描くということができないのかもしれません。しかし、社員一人一人がもっと大きな夢を描ける材料は数多くあるのではないかと感じています。

―その材料をどう活かしていくべきでしょうか。

恩地　例えば、ヘルスケアを例にとっても、当社は、総合医療情報システム、病院情報システムなどさまざまな事業を展開しています。スマートコミュニティ、スマートヘルスケアといった言葉が注目されていますが、当社は予防から治療、介護までの全領域をカバーしています。そうした技術や経験を社会に役立てていくためには、「その技術をどう活かすか」よりも、まず「社会の中で自分たちはどうありたいか」が大切であり、もっと自由に発想して、「この領域で特色を出していく」という強い信念を持つことが重要ではないかと思います。

当社は、主要パッケージベンダーからも、優秀なパートナーSIerとして認知されてきており、その部分ももちろん伸ばしていきたいと思います。また、当社は多くのよいお客様に恵まれており、そうしたお客様を大事にするためにも、自分たちの力をより発揮できる領域を深掘りしていくことが必要です。そのためには、当社の社会での位置づけを知り、そこからどうなりたいのか、という思いを描くことが大切なのです。実現可能かどうかを考える前に、まず思わなければ何も始まりません。稲盛和夫氏の言葉に、「人生・仕事の結果 ＝ 考え方×熱意×能力」というものがあり、私の座右の銘の一つにもなっています。何にも増して重要なのは「考え方」で、能力と熱意は0点から100点までなのに対し、考え方は−100点から+100点までがある、というものです。たとえ能力が普通でも、熱意があって徹底したプラス思考であれば、時間はかかったとしても必ず実現できると思っています。

―研究開発などでも新しい取り組みが必要ですね。

恩地　研究開発のテーマも、「この技術でナンバーワンになりたい」、「こういう事業を展開していきたい」、「こういう技術で社会に貢献したい」といった願望がまずあって、それに対する強い信念が必要と思います。そこに市場ニーズとのマッチングを考えていくことが、そのテーマでビジネスの成功を収められるか、社会に貢献できるのかを左右するのではないかと思いますから、そこに集中的に投資をしていきたいと考えています。

ITのパラダイムシフトに、いかに取り組むか

—ITのパラダイムシフトに注目が集まっていますが。

恩地　さまざまなお客様が積極的にそこに投資をされており、当社の対応も急務となっています。例えば、クラウドを活用することで、より便利なECサイトの運営が実現できる時代になっているのに、独自システムを提供してもスピードや価格競争力でかなうはずがありません。お客様の求めるものが何かを突き詰めていけば、私たちが変わっていかねばならないのは明らかです。しかし、そのためには、優れたモノづくりの技術と合わせてビジネスモデルを創出する能力が必要です。要望を十分吸い上げながらお客様の課題をスピーディーに解決する提案をしていけるような体制作りを進めるとともに、モノづくりの技術も、お客様に安心して任せていただけるよう一層の強化を図っていかねばなりません。

パラダイムシフトへの対応については、受託開発からパッケージ適用へ、オンプレミスからクラウドへ、製品の提供からサービスの提供へ、といったように、開発スタイルから提供するシステム形態までを同時に考えて進めねばなりませんから、ハードルは決して低いものではありません。しかし、次は何をしようかとのんびり構えていられるほど、世の中の変化のスピードは遅くないのです。全社員で高いバーを乗り越えられるよう取り組むことで、当社の未来が拓けるものと信じています。

—ソリューション事業のパラダイムシフトへの取り組みについて聞かせてください。

恩地　すでに取り組みを進めているクラウドについては、東芝ソリューション(株)のクラウド基盤の活用などはもちろん、新たなソリューションを発掘して強化・拡充を図っていきます。私は、何よりも、「作ったものを財産にしていく」という発想が大事だと考えています。お客様固有の要件で開発したものに「汎用化する」というプロセスを加えていくことで、当社の資産として次から使えるように品質を上げていくことにも取り組まねばなりません。自社開発したものをアセット化してお客様に新たなソリューションを提供し続けることで、それがパッケージとして成長していくことも考えられます。

組込みの分野では、技術を先取りしたIP(Intellectual Property)化を積極的に進めたいと考えています。お客様から要望をいただいてからIPを用意するのではなく、汎用化したIPを先にラインナップして提案し、個々のお客様のニーズに沿った形でカスタマイズしていくことで、より安価に品質のよいものが提供できるのではないか、ということです。もちろん、それを実現するには先行投資も積極的に進めていく必要がありますが、ぜひ、グローバル展開できるよう取り組んでいきたい領域です。

—当社の持ち味を活かすには、事業間連携もポイントになりそうですね。

恩地　当社は、ヘルスケア分野を見ても、ベッド周りの離床センサーを使った見守りシステムから、医事会計システム、健診システム、介護システムまでを幅広くカバーしているように、エンドデバイスに近い領域のセキュアな無線システムからシステムのサーバ側の処理まで、多岐に渡る要素技術や経験を持っています。しかし、それを「繋ぐ」という発想がなかなかできていなかったのも事実です。繋げばどういうソリューションやサービスが実現できるのかを、全社員が常日頃から考えていかねばならないのではないでしょうか。それによって、LSI設計からサーバ構築・運用までの事業を展開している当社の特色も出せるのです。技術、営業、管理職に関係なく、社会と当社の関係を常に見極めながら、自分たちに何ができるかを日常的に発想していくということが、求められているように思います。

当社は従来から、さまざまな企業とのアライアンスにより、お客様に合ったソリューションを提供してきました。クラウド時代になると、優れたサービスを提供している企業とお客様のニーズをいかに迅速かつ安価に繋いで提供していくか、という力も発想も大切になるでしょう。

—今回、本誌では、特集「IT融合とスマート社会」を掲げています。

恩地　当社は、IT業界においても特異なポジションにあるとよく言われます。セミコンダクタの論理設計からサーバ側の情報システムまでを一社ですべて提供できる企業はなかなかありません。スマート社会が到来すれば、センサー間でどういうデータが上がってくるか、そのデータをどう収集・管理し、社会に役立てるようにしていくか、ということが重要になります。当社は、まさに、センサー間のデータを収集・管理してシームレスにサーバに繋ぐまでの技術を持っています。つまり、「繋ぐ」技術を持った会社なのです。この「繋ぐ」という点にフォーカスしながら、お客様や世の中に貢献していければと思っています。

恩地 和明 社長 プロフィール

1954年福岡県北九州市生まれの57歳。大学3年のときに東芝日野工場に実習で行ったことがきっかけとなり、東芝に入社。プラント制御関連のシステム提案業務などに携わったあと、ものづくりを志望し、制御用計算機システムのソフトウェア設計に携わる。その後、情報系の設計部長、調達システムのプロマネ、東芝ソリューション(株)常務取締役などを経て現職。趣味は映画や音楽鑑賞、車の運転、ゴルフなど。